

2021年3月29日

防衛省南関東防衛局 局長 小波 功 殿  
横浜市長 林 文子 殿  
横浜市教育委員会 教育長 鯉淵 信也 殿  
横浜市会 議長 横山 正人殿

一般社団法人 日本建築学会関東支部  
支部長 高橋 徹

### 米軍根岸住宅地区ディペンデントハウスの保存活用に関する要望書

拝啓、時下ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、横浜市中区、南区および磯子区にまたがり所在する根岸住宅地区について、防衛省南関東防衛局におかれましては、解体工事等に関する工事発注入札を終了されている旨聞き及んでおります。また、横浜市では返還に伴う「根岸住宅地区跡地利用基本計画(案)」を策定し、市民への意見募集も終了されている旨承知しております。

根岸住宅地区は土地面積約 43 ヘクタールに及ぶ広大な住宅地で、昭和 22 (1947) 年、占領軍が接收し占領軍家族向け住宅 (ディペンデントハウス、以下 DH) を建設しました。以後、在日米軍の家族向け住宅として使用され続けてきましたが、返還に係る日米合意を受け、平成 27 (2015) 年 12 月にすべての居住者が退去しています。

DH は、終戦後の物資がない時代に、占領軍の指示の下、日本人技術者や建設業者が建設に携わり、占領軍の母国をモデルとする良好な郊外住宅地の景観や、合理的な平面計画、充実した住宅設備、さらには、生活関連施設を有する優れた住宅地を実現しており、戦後日本が目指すべき住宅の方向性を具現化したモデルとして、高い価値を有していると考えられます。DH は新築、改修を合わせて、日本全国の約 100 か所に約 1 万 3000 戸あったとされていますが、今日その多くが建て替えや接收解除に伴い失われています。DH については、文献的な調査研究は進んでいるものの、これまで実態の詳細についてはほとんど不明でした。根岸住宅地区は、建設当初の住宅地規模や住宅地の骨格、景観を維持しながら、当初からの建物群が改修を重ねながら近年まで使い続けられたてきた稀有な住宅地です。

また、根岸住宅地区は山手に連なる高台に位置し根岸競馬場とも隣接する好立地にあり、広大な敷地の中に、管理の行き届いた芝生の園地と洋風の住宅が、複数棟で小ブロックをつくりながら点在する景観は、占領前の根岸の原風景を継承するとともに、戦後日本人の憧憬の対象ともなった景観として貴重です。

従って、この根岸住宅地区内に現存する DH のうち少なくとも小ブロックを形成する複数棟を、現地において保存し利活用することができれば、横浜の、さらには我が国の文化遺産の保存に貢献するものと考えられます。

また、横浜中心部は占領軍による大規模な接収を受けましたが、戦後 75 年を経た今日、その歴史を伝える遺構は減少し続けています。根岸住宅地区は、占領期横浜の記憶を継承する上で好個の存在と考えられることから、よりよい保存活用計画の策定をご検討下さいますよう、お願い申し上げます。さらに、そのために不可欠な、専門的な観点からの詳細な現況調査を実施されることを合わせてお願い申し上げます。

なお、本会はこの建築の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

2021 年 3 月 29 日

## 米軍根岸住宅地区ディペンデントハウスについての見解

一般社団法人 日本建築学会関東支部  
建築歴史・意匠専門研究委員会  
主査 片山 伸也

### 1. 米軍根岸住宅地区ディペンデントハウスの概要

米軍根岸住宅地区は横浜市の中区箕沢、寺久保、塚越、大平町、山元町、大芝台、根岸台、南区山谷、平楽、磯子区上町、下町、馬場町、坂下町にまたがる高台に位置し、土地面積約 43 ヘクタールに及ぶ広大な住宅地である。

昭和 22 (1947) 年、上記に所在する農耕地を X 住宅地区として占領軍が接収し、家族向け住宅 (ディペンデントハウス、以下 DH) を生活関連施設とともに建設し、以後継続して米軍の家族向け住宅として使用された。竣工は昭和 23 (1948) 年 10 月で、施工は大林組が担当し、設計は GHQ のデザインブランチが担当した。

根岸住宅地区は、外国人居留地として知られる山手に連なる丘陵の西南部に位置し、幕末に開設された根岸競馬場 (戦時中に使用停止) に隣接する。山手から根岸競馬場にかけての尾根一帯は、眺望に優れ自然豊かな環境であることから、明治以降外国人たちの住宅も点在する地域だった。関東大震災後に建設された建築家 J. H. モーガン設計の馬見場を含む競馬場一帯も、根岸住宅地と同時期に接収されていたが、先んじて返還されている。

根岸住宅地区の詳細な建築実態については不明であるものの、国土地理院の航空写真や、断片的に得られる創建時以降の写真などをもとに住宅地の特徴を述べる。

横浜市のウェブサイトによれば、根岸住宅地区には住宅 385 戸のほか小学校、教会、図書館、銀行、郵便局、管理事務所等が建設されたという。

根岸住宅地区は南北に細長い住宅地で、既存の土地形状を巧みに利用して住宅地が整備されている。敷地を周回する道路も直線状ではなく、土地形状に沿って緩くカーブを描きながら設けられる。敷地西側には SKY LINE DRIVE、東側には RACE TRACK ROAD が通る。東西をつなぐ道路は住宅地をほぼ 4 分割するように設けられ、道路からのアクセスを確保しながら不規則に住宅群を配す。敷地西側には戸建住宅が多く、東側には連棟形式の住宅が多く配置される。

住宅は、単純な平行配置ではなく、戸建てや 2 戸建て、4 戸建てなどを組み合わせて配置されており、複数棟で中庭を囲み 1 ブロックとする配置が多くみられる。駐車スペースは、ブロックごとに中庭道路側に集中して置かれ、住宅ごとの敷地境界は設けず、広大な

芝生の庭園の中に住棟が点在しながら連続する景観は、豊かなアメリカの郊外住宅地を想起させ、敗戦後の日本人には強く印象に残るものだった。

占領軍は終戦後、日本に駐留する将兵が本国から家族を呼び寄せて暮らすため、DH 2万戸の建設を日本に要求した。本国並みの生活を維持するため、住宅の配置から生活に必要な家具、什器、電化製品などの全体計画を提示した。日本はこれに対し削減要請を行い、その結果1万戸余りのDHが建設されたという。

占領軍はDHの計画について『DEPENDENTS HOUSING』としてまとめ刊行している。同書の「配置基本方針」によれば、各住戸は、戸建てとともに2戸や4戸を並べた2戸建て4戸建てとし、8戸程度から12戸程度の住宅を1ブロックとして、共通の中庭を囲むコの字型配置とするよう考えられていた。また、配置にあたっては隣棟間隔の基準を設け、4戸建ての場合には建物を雁行型に連続させるなど単調な景観とならないよう配慮されている。

また、構造は工事の容易さを優先させ、在来の軸組工法を採用するものの、アメリカ式工法である壁下地の斜め張りや洋小屋組とし、また、設備は中央式暖房と給湯方式を採用するなど、当時のアメリカ住宅の水準を再現したもので、戦後日本の住宅計画並びに住宅地計画に大きな影響を与えたと考えられている。

一方、DHの具体的な建築実態については従来ほとんど明らかにされておらず、占領軍の計画がどの程度実現したかについてはほとんど不明である。その意味でこの根岸住宅地区は、戦後日本のDHの実態を解明する貴重な資料となりうる稀有な住宅群といえるのである。

## 2. 根岸住宅地区ディペンデントハウスの価値

根岸住宅地区内DHの価値は以下の3点に集約される。

### 1) 占領初期に建設されたDHとしての価値

占領軍は終戦後日本全国約100か所に約1万3000戸のDHを建設したという。しかしながら、DHについて、現存する具体例に即して検証されたことはなく、その実態はほとんど不明である。横浜では、本牧や山下公園にもDHが建設されたがいずれも現存せず、全国的に見てもDHの現存例は極めて限定的といえ、その実態を示すものではない。その点、根岸住宅地区は昭和22(1947)年に接収され昭和23(1948)年10月に竣工していることから、DHの最初期の事例であることが明確であり、DHの実態を解明する貴重な資料である。

根岸住宅地区のDHは外観目視によれば、外壁や建具などに改修が加えられていることが確認できるが、躯体そのものは良く維持されており、さらには、建設時の敷地形状や住宅配置がほぼ当初のまま継承されていることが確認できる。

このことから、根岸住宅地区はDHとしての姿を今日まで維持している住宅地として、極めて貴重であり学術上高い価値を持つものである。

### 2) 景観上の価値

根岸住宅地区は、外国人居留地として知られる山手に連なる丘陵の西南部に位置し、山手から根岸競馬場にかけての尾根一帯は、良好な景観と自然豊かな環境であることから、明治以降外国人たちの住宅も点在する地域だった。根岸住宅地区は農耕地だった占領前の土地形状を損なうことなく造成されたと考えられ、起伏に富むその景観は、占領前の根岸の原風景を継承するものである。また、広大な敷地の中に、よく管理された芝生の庭園と洋風の住宅群が小ブロックを構成しながら連続して点在する景観は、戦後日本人の憧憬の対象ともなった景観として貴重である。

### 3) 横浜の占領時代を示す歴史遺産としての価値

横浜は、占領軍による大規模接収が行われた地域である。また、根岸住宅地区にみられるようにその影響は実は長く続いている。焼土となった横浜中心部のほとんどが接収され、横浜公園には多くの米軍施設が設けられ、山下公園の中に DH が建設されていたことなど、現在では過去の歴史として記憶されるのみである。こうした現状の中で、根岸住宅地区は横浜中心部近くに立地し、また、DH は「住宅」という身近な存在であることから、占領期横浜の歴史を後世に伝えることのできる好個の歴史遺産として貴重である。

#### 参考文献・参照ウェブサイト

- ・『デペンデントハウス』商工省工芸指導所，技術資料刊行会発行，1948
- ・『DEPENDENTS HOUSNG』ENGINEER SECTION FEC
- ・『進駐軍家族住宅図譜』上田次郎，技報堂，1950
- ・『占領軍調達史 部門編Ⅲ』占領軍調達史編さん委員会，1959
- ・『占領軍住宅の記録(上)(下)』小泉和子・高藪昭・内田青蔵，住まいの図書館出版局，1999
- ・佐藤洋一「東京都内の米軍接収地に関する都市史的考察（日本建築学会学術講演梗概集 F，1992 年 8 月）」ほか
- ・村上しほりほか 5 名「占領下日本における部隊配備と占領軍家族住宅の様相」（日本建築学会計画系論文集 2017 年 9 月）ほか
- ・『根岸米軍住宅跡地を生かした未来に繋ぐまちづくり検討報告書』根岸のまちづくりを考える会、2007 年
- ・横浜市ウェブサイト 根岸住宅地の跡地利用  
<https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/seisaku/torikumi/kichi/beigun/negisitochi.html>  
閲覧日 2021 年 3 月 10 日

参考資料

写真

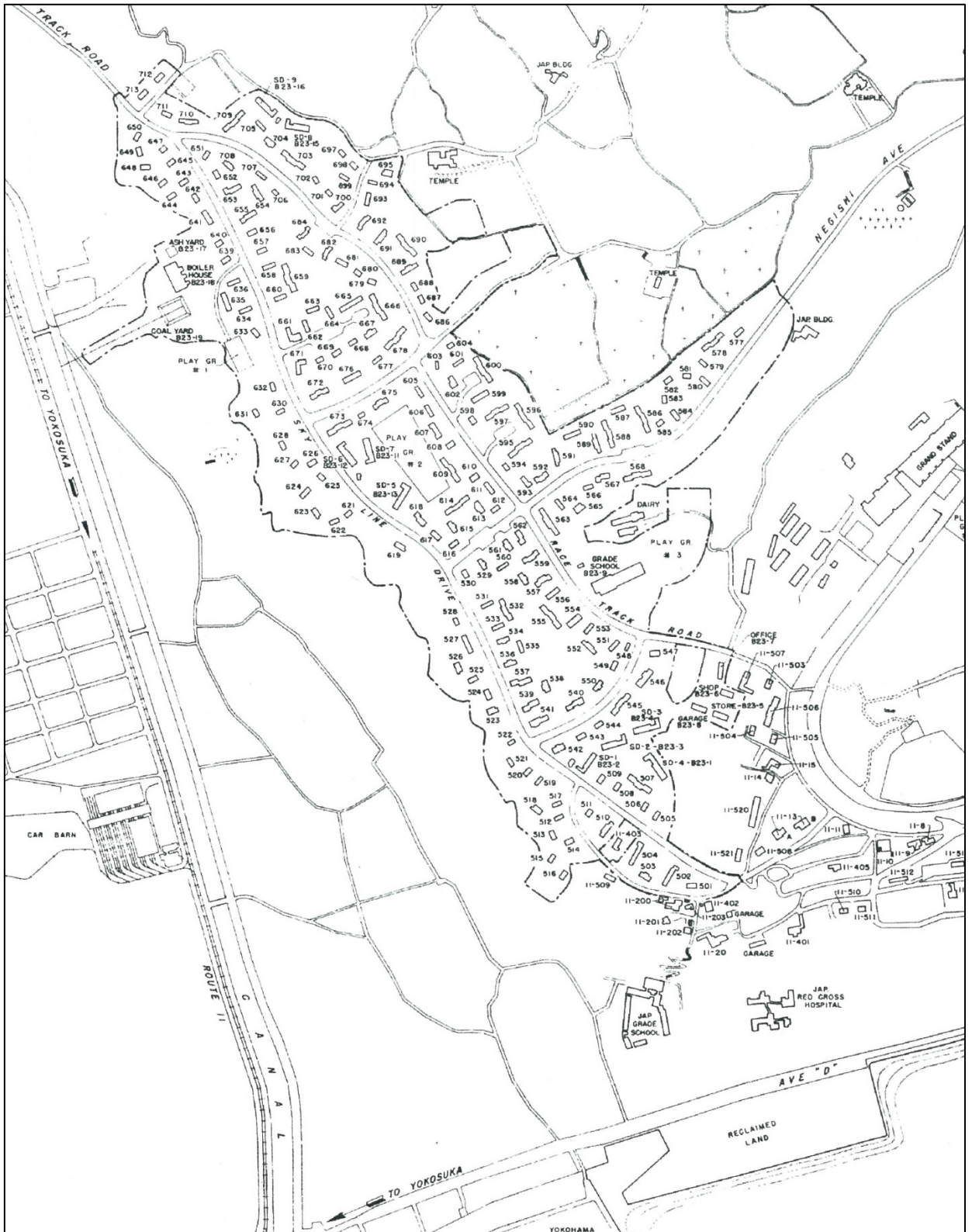


竣工時の根岸住宅地  
『大林組八十年史』より  
(大林組社史編集委員会編、1972年ただし、ウェブ版を参照)



1970年ごろの根岸住宅地  
「展示図録 写真記者五十嵐英壽がみつめた港の半世紀」(横浜都市発展  
記念館、2014年)より 撮影 五十嵐英壽 横浜都市発展記念館所蔵





「DEPENDENT HOUSING AREAS YOKOHAMA」  
 (1949年1月17日作成、横浜市史資料室所蔵)  
 創建当時の住宅配置図

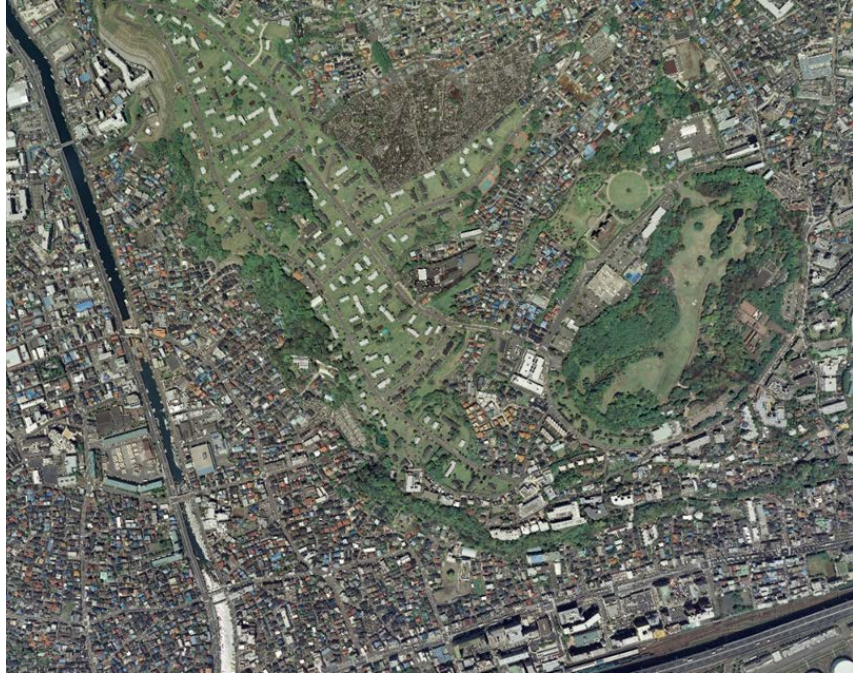


航空写真 1947年7月24日 (国土地理院 UM378\_CB\_0083)  
建設前の農耕地だった時期の根岸住宅地区



航空写真 1949年2月28日 (国土地理院 UR582\_CA\_0042)  
土地が造成されDHが完成した様子わかる





航空写真 2007年（国土地理院 CKT-2007-2-2-C17\_0033）  
1949年当時とほぼ変わらない住宅地区の様子

現状写真



根岸住宅地区南端旭台に位置するゲート周辺のDH 遠景



根岸住宅地区南端旭台に位置するゲート周辺のDH  
502 の家屋番号が確認できる





根岸住宅地区中央東側のDH  
複数棟で中庭を囲む小ブロックの様子がわかる



根岸住宅地区中央東側に突き出した部分の戸建てのDH  
左側奥の3本の塔屋を持つ建物が根岸競馬場馬見場